

昭和五二年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)26117079  
振替 東京0158431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額 400円 6カ月前納制

### 〈もくじ〉

■ 巻頭言	2
「反全民労連」の具体的たたかいを	2
「下から」運動をつくる	3
—— 佐世保地区集會に三百人 ——	5
全民労連は歴史のあだ花	5
—— 一一・一九青年集會報告 ——	6
資料1 一一・一五全道シンポジウム「アピール」	6
資料2 一一・二〇京都集會「宣言」	6
一〇月革命とペレストロイカ	8
—— ゴルバチョフ演説要旨 ——	11
右翼再編ゴリ押しに一定の歯止め	11
—— 三多摩協協大會の報告 ——	13
社会党を守るために	13
◇全通の仲間から◇郵便営業時代を切る	14
連載「資本論」第一巻を読む 42	14
価値の尺度(五)	16
「連合」の歌パロディ	17
読者からのおたより	15
社会通信号外発行	18
定価六百円	18
労働統一と全国地県評の方針	18
編集部だより	15

# 旬刊 社会通信

NO. 354

一九八七年二月一日

一九八七年二月一日発行

(毎月一日・十一日・二十日三回発行)

## ■巻頭言■

## 「反全民労連」の具体的たたかいを

「いま、闘いするとき。労働運動のとりで・総評を守り抜こう!!」を合言葉に(1)総評労働運動の継承・発展をかちとる、(2)一千ヶ所総学習をつくる、(3)社会党の基本政策転換を阻止することを目的とした全国の仲間たたかいは、われわれの予想を超える盛り上がりを見せた。

兵庫では「たたかう総評運動の継承・発展をめざす一一・二七兵庫県民集会」に四千八百人の人びとが集った。兵庫では昨年も国労支援集会を五千人の規模で成功させた。約一千人のよびかけ人で実行委員会をつくり、全県下で実行委で総学習を展開し、「下から」総評の闘う伝統を守りぬく、その力をつくるとりくみだ。

大阪では「総評労働運動の歴史と伝統を守り、継承・発展をめざす一〇・七集会」に三千人、さらに一一月二〇日の集会も成功させた。国労、全港湾両労組を軸に全日建連帯労組や化学一般関西地本等の機関参加、それに教組、全通、自治労の仲間たち六七一人が賛同人となっておこなわれた。

京都では「労働運動の右より再編・全民労連反対一一・二〇京都労働者総決起集会」が円山音楽堂でおこなわれた。参加者は約一万二千人。来ひんとして岩井章(総評元事務局長)、春山明(統一労組懇事務局長)があいさつした。

奈良では一一月二〇日、「全民労連反対・総評を守る交流集会」がおこなわれ、一二月二日、「総評労働運動の歴史と伝統を守り、発展・継承をめざす奈良県集会」が実行委形式でとりくまれる。

四国では本誌第三五一号の巻頭言に明らかだが、徳島、高知、愛媛でとりくまれた。愛媛の松山でおこなわれた「地域労働運動の継承・発展をめざす集会」は、総評労働運動の歴史と伝統を具体的なカタチで実現したものとして、きわめて意義が深い。

関東でも報告をのせた「一一・九反対首切り、反失業、労働基本権確立、総評労働運動を強化する青年集会」、「一一・二〇首都労働者総決起集会」が開かれ、それぞれ千人、五千人が参加した。

千葉では「労働戦線の右翼再編反対、まともな労働運動の前進をめざす一一・一九千葉県労働者総決起集会」が約三〇〇の単産・単組のよびかけでおこなわれた。

北海道では一一月一五日、札幌で「総評労働の強化・発展を旨とし、反首切り、反失業の闘いを強める全道シンポジウム」、「反行革・反失業、地域労働運動の発展をめざす十勝集会」等が、それぞれ二百人、五百人で開催された。また足寄町では一〇月二九日、「労戦統一を考える集い」といった創意にあふれた集会がもたれている。

北信越では「総評労働運動の継承・発展をめざす一一・一七富山県集会」、「県評・地区労働運動の継承・発展をめざす新潟県集会」がある。その他、本誌で紹介している佐世保地区のような集会もある。さらに杜青同は三十数県で同趣旨の集会を開催した。

これらの闘いをこれからの闘いの出発点にすることが重要だ。前号の巻頭言にあるように、全民労連は弱点をいっばいもっている。彼らを支えているのは資本の力だ。資本の力を打ち破る、そのためにはわれわれが力をもつ以外ない。大衆運動をつくりだすことである。さらにもう一つ。社会党大会は二月一日から三日間、「反全民労連」のたたかいで培った力を党建協につなごう。平和と民主主義、憲法の問題なのだから。

# 「下から」運動をつくる

——佐世保地区集會に三百人——

国労長崎県支部佐世保地域分会は、一月二〇日の「全民労連」発足を目前にし、一月一七日佐世保市労働福祉センターにおいて「県評・地区労運動の継承・発展をめざす」佐世保地区集會を開催した。

当日は、国労組合員一三〇名・他単組・団体二二団体を含め三〇〇名の仲間が結集し、熱気あふれる集會となった。

## 四つの問題意識

この集會を開催するにあたり、佐世保地域分会執行委員会は、次の点を意思統一してきた。

- 一、国労本部の方針にもとづき「全民労連」に加盟せず闘う労働組合の地域での共同行動を進めること。
- 二、県評・地区労が培ってきた運動は、労働者・市民の貴重な財産であり、とくに佐世保は、軍事基地をかかえ過去の歴史のなかでもエンブラ闘争、むつ闘争等、反戦・反基地・平和と民主主義を守る闘いの中心を担った。さらにそれらを強化すること。
- 三、反労働者的な全民労連の「進路と役割」が職場末端の組合員まで浸透せず、討論がないまま上部だけで決定されようとしていることの問題点を明らかにしていくこと。
- 四、差別・選別・不当労働行為を許さず、これまでの国鉄闘争を地域の仲間にも広げ、国労に対する支援の要請と各職場での攻撃と闘いに学び共同行動の必要性をつかむこと。

## 連帯の必要と原則を痛感

以上の四点を意思統一し、全執行委員と青年部常任委員で地区労傘下の各単産へ足を運び集會へのよびかけと交流を行った。その中で私たちに對し、賃金、労働条件、職場の状況、これまでの闘いと組織問題等の意見や質問が集中し、時間が足りないほどで、国労に注目していることを知らされた。また、ほとんどの職場で、国労が経験した「赤字攻撃・権利剥奪・思想管理・健康破壊」等、雇用不安と、もの言わぬ労働者づくりが急速に進行していることも学んだ。

全体的に言えることは、国労自身が、まだ地域闘争に深くかわりをもちえなかつたことを率直に反省しなければならないし、今日の労働者のおかれている状態は「まだなんともかなる」というものではなく、一人ひとりの組合員を大切にするといふ本来の労働組合の原則が求められていることを痛感した。

## 分会青年部の歌声で幕明け

集會は、分会青年部の歌ごえから始まった。これまで青年部は、集會成功に向けて昼休みや勤務終了後全員が参加し練習してきた。その間、当局は練習さえも妨害する攻撃を加えてきたが、それらをはね返し、本番では力強い歌ごえで開会したのだ。

社会党・地区労の来賓あいさつをうけた後に、国労九州本部永島委員長より講演。「組

合の主人公は組合員であるにもかかわらず、あたり前のことをあたり前と言えなくされているのが「全民労連」。「連合があっても基地問題を抱えた佐世保のように地域特有の問題は解決できない」「清算事業団における雇用と人権を守るたたいは、日本の民主主義を守る闘い。JR職場では憲法・労組法を無視した攻撃が続いている。それは安全・サービス・運転保安の切り捨てであり、労資協調ではこれらは守ることはできない。」

「労資協調路線の労組が大勢を占めれば、戦争前の日本の情勢とまったく同じになる。だからこそ、私たちは平和と民主主義を守るために、その中心になって闘ってきた県評や地区労運動解体する訳にはいきません」と力強く訴えた。

### 運動に自信と確信

集会参加者からは「全民労連の動きや問題点について理解ができた。その方針そのものが資本に加担していると思う。総評運動を継承発展させるためにも、このような集会をもっと細かく行っていくことが必要」（全港湾労働者）、「労働組合とは何かということを改めて考えさせられた。この集会は全民労連発足前であり时期的によかったと思う。今、職場では、営業活動・小集団があたり前になっており、階級対立がボカされている。そこを明確にしていくなから権利闘争を強化していきたい」（全通労働者）、「私たち職場で働いている者として『全民労連』についての議論が少なかつたが今日の集会で、地区労運動重要性を改めて感じさせられた」（全農林労働者）、「あたり前のことをあたり前と言えぬ職場をつくるために国労の皆さんと共に頑張り続けたい」（民間労働者）等々の感想をいただき、私たち集會を主催する者はたいへん勇気づけられた。

また、三池における闘いの映画上映では、「労働者の団結の力強さと資本に対する怒りがこみあげるばかりか、途中で胸がつまり涙が出た。歴史をしつたり見て学ぶこともできなし、労働者は命まで売っていないということが印象的であつた」という感想もあつた。

集會は、席をたつ人もなく参加者が熱心に耳を傾けた。私たち国鉄労働組合佐世保地域分会としては、九州でもこのような集會は初めてということで不安はあつたが、集會参加をよびかけるなかで多くの職場から逆に国労に対する激励にあい私たちは今日まで続けてきた運動に自信と確信をさらに深めた。

労資協調路線では雇用も権利も守ることはできないことが他職場と交流するなかで明らかに、「闘えば損をする」「国労みたいにならないために……」ということとは決して現場労働者の気持の中にはないことをつかむことができた。

最後に、国労は決して孤立しているのではない。私たち自身が弱さや不安を隠すことなく実態を訴えつづけ闘いを呼びかければ、仲間はず私たちに応えてくれる。今、私たちは足踏みをしてはいけけない、もっと前にでていくことが大切である。

日本労働運動を強化していく鍵をにぎっているのは現場労働者であることを決して忘れてはならない。したがって、私たちは上からの運動ではなく、下からの運動をつくりあげていく以外にない。このような小さな旗揚げを全国各地で開催されることを期待する。

（国労長崎県支部地域分会）

## 全民労連は歴史のアダ花

—— 一一・一九青年集会報告 ——

「労働者の魂を奪われた全民労連に未来はない！」——同盟（全日本労働総同盟）が一月一九日夕刻、政府・財界のお歴々を囲み、同盟解散の盛衰を張っているちようどその頃、皇居近くの千代田公会堂では、総評労働運動を強化する青年集会が開かれていた。主催中心団体の国労、日教組青年部員をはじめ自治労、私鉄、全林野、全タバコ、日東タイヤ、昭電等争議団の闘う仲間たち一千人が参加。

規模が小さい、などと野暮なことをいうなかれ！ 明くる二〇日の全民労連結成が政府・独占の肝いりであたかも国民的行事であるかのように粉飾され、労働組合や野党の牙を抜かれすっかり老けこんだボス共が、職場労働者の反乱にビクつき、青年集会に参加はまかりならんと統制してきているんだから。そもそも、政府と独占が数百万人もの首切りの恫喝でつくりあげた大きな流れに逆い、反資本主義を鮮明にした集会をもつこと自体に何ものにもかえがたい歴史的意義があるんだから。

集会はよかった。まず、私鉄東武東上支部の三木さんの講演の姿勢が新鮮だった。持ち時間四五分、「あと二〇秒」、タイマーがピーピーと鳴ると、さつさと原稿をカバンにしまい一礼して、舞台袖に姿を消した。「若い諸君、時間を守りなさい。日常の規律なくして運動はないよ」そう教えてくれるんだと思った。話も、背中がときどきビキビキとくるほど痛烈だった。

「みなさん、マンガなんか読まないで、歴史の本でも読みなさい。青年は自分の生き方を真剣に考えなければいけません。青年は未来を語る。老人は過去を語るっていうじゃないですか」「これからは実力のある者が歴史の前面に出てくる時代です。人の批判や敵をつくることはかり上手になったり、気の合った仲間同士でシコシコやっているのは本来の姿ではありません。自分で方針をつくり、自分で執行することです」「運動は生きざま」と黒田さん（元大阪読売社会部記者）がいました。今にみているという根性とかまえと戦略をもっていますか。体を鍛えなさい。頭を鍛えなさい、休むことも闘いです」

これを先輩のお説教と聞き流した者はまずいなかったろう。なぜって、三木さんの東上支部では、きちつとやるべきことをやっているんだから。分割・民営反対闘争では上部や周囲の批判にも敢然として、国民会議に参加したし、沖電気の争議団には常に大衆カンパに率先取り組んだ。いや、なによりも「みんな決めてみんなで実行、意見が違うから会議をやる」作風をつくり、「不満は要求に、闘いを職場から」を実践してきた。五年間かけて一人学習四時間の目標で、もうすでに六百人を育てたともいう。またすごいなと思ったのは、今年の私鉄総連の大会で労働方針に百八票の反対が出たけれども、八三年の大会のときは、約四分の一の反対票がどこから出たか分らなかったが、今年はいきちんとつかんだ、といったことだ。そんなわけで、三木さんが「こんないい時代はない」とか「全民労

連は歴史のアダ花。未来はない」というと真に迫る説得力があった。

もう一つ付け加えておきたいことは、七人の参加者代表が決意表明をしたが、全タバコの仲間が、堂々と発言したことだ。こうやって態度をもって示してくれると本心に勇気づく。総評をつぶさないために自分のやるべきことがハッキリしてきたぞ。(国労・K)

### 資料1 一一・一五全道シンポジウム「アピール」

全道の仲間のみなさん!!

総評は先の大会で、多くの単産、県評の「反対」「慎重に」と言う発言があったにもかかわらず、「全統統一は何人も否定しがたい事態になっている」として「一九九〇年解散」を決定しました。

この間言ってきた「五項目」「三問題」についても、なしくずし的に「取り入れられた」として、踏み込んできています。

私たちは、国鉄闘争の中で、多くの仲間を失いながらも、独占資本・当局は何一つ労働者の生活や権利、将来について考えていないこと、利潤のためであれば平気で首切りを行ない、労働者をノイローゼ、自殺に追いこむことが分かってきました。

だからこそ、労働者の生活と権利を守り、反独占・反自民の路線をもった労働組合が必要であり、闘う指導部が必要であると言うことです。

その意味では、日本の労働運動の中軸であり、全国の地域・単産の闘いをひっぱってきた総評が解体され、全労協路線のもとに「全統」統一されていくことは、独占資本にとつて賛美されるのみで、働く者にとっては、死活の問題になってくることは明らかです。

国鉄の分割・民営化による大量首切りだけでなく、林野、造船、炭鉱、その他全ての職場で大量首切りが拡がり、一人一人の労働者が、不安に追い込まれてきています。

このような時にこそ、地域、単産をこえた仲間の連帯と、共闘運動の拡大が必要になってきています。総評の闘う路線を守り、強化させていくことが私達一人一人の任務になってきています。

総評は既に解体に向けて具体的な作業に入っています。道内においてはセンター、地区労の中で、この間の闘いの中でつかんできた路線と中身について、ハッキリさせ、全体化させていくことが急務になってきています。

「一一・二〇連合結成」に反対し、残された二年半総評解体阻止に向けて、全道の仲間一人一人が具体的な行動と討論を作り、反首切り、反失業の闘いに全力をあげていこう!!

### 資料2 一一・二〇京都集会「集会宣言」

本日、選別排除、「労資協調」を旗印とした労働運動の右より再編をすすめる全労連が結成され、今宵新宿のホテルまでは政府や財界などに祝福されながら宴が催されていま

す。

ここ京都では、円山音楽堂の一万二千人をはじめ府下各地で、多くの労働者が「全民労連反対、労働者・国民の生活と権利を守る労働運動の構築を！」と総決起しています。

全民労連の運動方針をみても、「国際協調を重視しつつ、経済・産業の基盤を整備・強化し、円滑な産業調整を押し進め、活力のある産業社会を実現する」とあるように、自民党政府や財界の口調と変わる所がありません。

また、全民労協発足後の数年間を見ても、賃上げ要求を自粛し、「ストなし、低額一発回答・妥結方式」といわれるように賃上げ最低額をくり返してきたことや、自民党中曽根政治が進めてきた臨調・行革路線に積極的に加担してきたことなどからも、全民労連の運動方向が、労働者・国民の要求に背を向けるものであることは明らかです。

京都でも、全民労連の地域版づくりにむけて、活発な動きが伝えられるだけに、闘う戦線の強化が求められています。

戦後の労働運動をふり返るとき、三池闘争、安保闘争、ベトナム反戦、小選挙区制粉碎そして国民春闘と、反独占・護憲・平和の立場から資本や権力の攻撃と闘い、労働者・国民の利益を守り、平和と民主主義のために闘ってきた総評を軸とする我が国労働者階級の戦闘的伝統を継承・発展させなくてはなりません。

自民党政府や財界は、戦後政治の総決算と称して、軍事費の1%枠はずし、円高・産業の空洞化政策、国鉄つぶし、マル優廃止、大型間接税の導入、教育臨調、労働法制の大改悪、そして国家秘密法のたくらみと、次々に攻撃を強めています。中曽根から竹下政権に移っても攻撃の本質が変わる所はありません。

こうした時、我々の進むべき闘いの方向は自ずと明らかです。

本日のこの集会がかかっているスローガン「労働者・国民の生活と権利を守る労働運動の構築を！ 総評解体反対、国民春闘を再構築しよう！ 産業構造の再編」反対、中小労働運動を強めよう！ 国家秘密法など政治反動に反対し、平和と民主主義を守ろう！」の実現にむけて、力強く闘いを進めようではありませんか。

京都のすべての労働者のみなさん！ 政府・財界とゆ着し、労働者・国民の要求に背を向ける全民労連に未来はありません。

ここに総決起した我々は、日本労働運動の階級的強化と総結集のため、その先頭に立つて奮闘しようではありませんか。

すべての職場や地域から、統一と団結を強めつつ、我々の闘いを積み上げ、全国の仲間と連帯しながら怒濤のような前進をはじめましょう。

一九八七年十一月二〇日

## 一〇月革命とペレストロイカ ——ロシア革命七〇周年記念式典でのゴルバチョフ書記長の演説——

一月二日のモスクワで開催された「一〇月社会主義大革命七〇周年記念式典」でゴルバチョフ・ソ連共産党中央書記長は、「一〇月革命とペレストロイカ」と題し国内改革、歴史、内外情勢などについて約二時間にわたって演説した。以下はそのうちの歴史に関する部分の抜粋である。

### ロシア革命の歴史的意義

われわれの前人未踏の道は、きわめて長く複雑なもので、短い分析でそのすべてを語りつくすことはできない。旧世界と第一次世界大戦、内戦、干渉の物質的、精神的遺産の重みもあった。変革の新規さ、人々がそれに向けた希望、新しい不慣れなものの侵入の規模とテンポもあった。革命のあらしの時期に特別の役割を演じる主体的要因もあった。革命期の最大限主義に貫かれ、時には単純化され、直線化された未来観もあった。新生活をめざして闘う人々の、万事をできるだけ早く、よく、公正にやっつけようとする純粋なひたむきの意図もあった。

踏破された道、そのヒロイズムとドラマチズムは、現代人を感動させずにはおかない。われわれの歴史は一つしかなく、それを後戻りさせることはできない。一〇月革命は、自由と平和、社会的公正をめざし、階級的、民族的、精神的抑圧に反対する思想と勤労者の積年の闘争の実践の発展の当然の結果であった。

ロシア革命は、過去の偉大なヒューマニストから一九世紀と二〇世紀のプロレタリア革命家にいたるまでの人類の最良の思想家たちの夢想の生きた具現となった。一九一七年は、自主的発展と独立をめざす人民闘争、進歩的な民族運動、わが国の歴史の特徴をなす農奴制反対の農民蜂起や農民闘争のエネルギを、自らの中に取り入れた。

一〇月革命は、幾百万人の人々の力強い高揚であり、その中で労働者階級の根本的な利益、農民階級の宿願、兵士と水兵の平和への渴望、自由と光に対する多民族ロシアの諸民族の根絶しがたい希望が結合した。さまざまな利益の複雑な組み合わせの中でポリシエビキの党は一番重要なものを見つけ、相反する傾向や志向をまとめ、それらを革命の主要な問題——権力の問題の解決に向けることができた。

### レーニンの革命的弁証法

現在、実生活と革命の現実が提起している問題に対するレーニンの答えは特に緊要なものとなっている。それは、社会主義への道の理論的「モデル」と社会主義建設の現実の実践との関係の問題である。近視眼的な教条主義とは無縁のマルクス・レーニン主義の学説は、革新的な理論と実践や革命闘争の行程そのものとの活発な相互作用を保障する。そのきわめて教訓的な実例が一〇月大革命である。

周知の通り、当時の労働運動の多くの活動家は、著名な活動家でさえ、一〇月社会主義革命を法則的な現象と認めることを拒否した。彼らに言わせると、革命は「ルールに反して」起こり、既成の理論的見解にもとづいて起こらなかったというのである。彼らの理解によれば、ロシアの資本主義は一九一七年一〇月までに社会主義のあらゆる必要な物質的、



文化的前提をつくり出していなかった。

マルクス主義を教条的に、杓子定規に解釈する者はこの学説の中の主要なもの、その革命的弁証法を理解できない。まさにこれがレーニンの一〇月後の全活動の特徴となっている。

まさに革命的弁証法が、文字通り可能と不可能との境目の上で、幾千幾万もの生命と社会主義祖国の存在そのものを救ったブレスト講和という政治的、道徳的偉業を成しとげるのを助けた。

われわれが踏破した道の世界的意義を評価するにあたり、われわれは短い期間で他人が何世紀もかかってやったことをなしとげたことを改めて納得するのである。

社会主義革命は、資本主義発展の中期のレベル、工業の高度の集中、農民人口の優位、封建制やさらにはそれ以前の社会構成体の根深い遺物をもった国で行われた。ロシアは科学と文化の分野において世界に偉大な達成を与えたが、しかしその住民の四分の三は文盲であった。この国は帝国主義戦争と無能な管理によって極端に荒廃していた。新しい生活の建設には見本はなかった。建設は創造的な解決のうむことを知らぬ探求を前提とした。

大衆の生き生きとした創造の中で多様な制度をもつロシアの複雑な素材から、歴史上前例のない社会の組織形態である将来の社会主義制度の原則と規範ができた。人民権力の形態、所有の集団化の方法と境界、社会主義的生産の組織、新しい同志的規律の確立、新社会における人間の位置と役割についての当初は純粹に理論的なものだった概念が精密化され、現実の生き生きとした内容によって満たされた。

レーニンの指導のもとで開始された社会主義建設は、原則的に新しい多くのものをもたらしした。

### 歴史的眞実にもとづいて過去を評価

歴史的責任感を持ち、歴史的眞実にもとづいて過去を評価する必要がある。これをしなければならぬのは、まず第一に、わが国の運命、社会主義の運命にとってあの時代が絶大な重要性をもっているからだ。第二に、その歳月はわが国ばかりでなく、眞実の探求とならんで、新社会体制、資本主義に代わる現実的な選択肢としての社会主義の威信を傷つける試みがしばしばくだでられている外国でも長年の論議の的となっているからだ。

レーニン以後の二〇―三〇年代について述べよう。党と社会がレーニンの社会主義建設構想で、一〇月革命後の時期のレーニンの著作で武装していたにもかかわらず、方策の探求は全く容易ならぬもので、激しい思想闘争の中で、政治的討論の中で行われた。論議の的となったのは、社会発展の根本的諸問題、何よりもまずわが国における社会主義建設の可能性に関する問題だった。社会・経済変革をどんな方向でどんな形態で実施するか、それらをソ連が置かれていた具体的歴史条件の中で社会主義の基盤に立ってどう解決するか、理論的思考と実践によって探求された。

最高の責任を要する実際的で建設的な活動が日程にのぼった。何よりもまず、国の工業化と経済の再建が切実な問題となった。

革命前も革命後も、社会主義建設の初期にも、決して党のすべての指導者が一連の重要問題に関してレーニンと見解を同じくしていたわけでは決していない。その上レーニンの助言は、新社会建設の具体的な問題すべてに及んだわけではなかった。当時の思想上の論争を分析する際には、当時のロシアのような国で巨大な革命の変革を実施すること自体がき

わめて困難な課題であることを考慮する必要がある。国は歴史の行進の途上にあり、国の発展が急激に加速し、社会生活のすべての側面が急激に、根本から変わっていた。

思想闘争は、階級と社会グループ・階層のありとあらゆる利益、時代の要求と課題や歴史的伝統のすべて、緊急課題の圧力、さらには敵対する資本主義の包圍という条件を反映したもののだが、この思想闘争が経済、政治や、人々の生活のあらゆる領域での出来事やプロセスと分かちがたくからみ合っていたのである。

要するに、それほど困難な、激動する状況の中で唯一確実な道を見きわめ、見つげだすのは至難であった。思想闘争の性格は、党指導部内の個人抗争によってもかなり複雑になった。レーニンの存命中からあった古い意見対立が、新しい状況のもとでも、しかもきわめて鋭い形で、表面化した。一部の権威ある活動家に小ブルジョアの性質が支配的になった。彼らは分派活動をとった。これが党組織をゆるがし、現下の問題から遠ざけ、仕事を妨害した。彼らは、自分たちの意見がレーニンの理念や構想に反し、自分たちの提案が誤りで、正しく選びとったコースから国を逸脱させるおそれがあるということが党内の圧倒的多数に明らかになった時ですら、分裂を挑発し続けた。

これに該当するのが、まず第一に、トロツキーで、彼はレーニンの死後党内主導権を法外に強く要求して、極端に自己過信が強く、つねにごまかしやベテンをろうする政治家だとするレーニンのトロツキー評価を完全に裏付けた。トロツキーとトロツキストは資本主義の包圍のもとで社会主義を建設する可能性を否定した。対外政策では革命の輸出を、国内政策では農民に対する「ネジの締めつけ」、都市による農村の搾取、社会管理面への行政的・軍事的方法の延長に期待をかけた。トロツキズムは、政治的潮流であり、そのイデオログたちは左翼的な、えせ革命的な言辞に隠れて、本質上降伏主義的立場をとった。

#### 実生活はレーニンの正しさを証明

こうした中で全国民にトロツキズムの正体を暴き、その反社会主義の本質を明るみに出す必要があった。事態は、トロツキストがジノビエフやカーメネフを先頭とする「新反対派」と連合したことによって複雑になった。反対派のリーダーたちは、自分たちが少数派であることを理解し、再三再四党に論争を押しつけ、党の隊列の分断を当てこんだ。しかし結局のところ党は中央委員会の路線を支持し、反対派を否定し、反対派は思想的にも組織的にも粉砕された。

トロツキズムの思想的粉砕で重要な役割を果たしたのは、プハーン、ジェルジンスキー、キープ、オルジョニキーゼ、ルズタクらである。二〇年代の最後には農民を社会主義の軌道に移す道の問題をめぐる激しい闘争が展開された。その中で、ソビエト社会の新たな発展段階でネップの原則を適用することに對する政治局の大多数とプハーン派の異なる態度が本質的に顕在化した。

当時の具体的条件——国内条件も国際条件も含めて——は、社会主義建設のテンポを大幅に引き上げることと緊急課題として全面に押出した。プハーンとその支持者たちは、その計算や理論的命題の中で、三〇年代の社会主義建設における時間の要因の意味を過小評価した。彼らの立場を多くの点で決定したのは、教条的な思考、具体的情況の評価の非弁証法的性格であった。プハーン自身も、彼の支持者も、まもなく自らの誤りを認めた。実生活はレーニンの正しさを改めて裏付けた。

(みだしは編集部)

## 右翼再編ゴリ押しに一定の歯止め

——三多摩労協大会の報告——

### 緊張感の高まる大会に

三多摩労協（一五単産・八地区労、四万三千人）が一月六日に定期大会を開催した。議論は「労戦統一」に集中。それというのも、これまで階級闘争路線を標榜してきた三多摩が、突然、労戦の右翼再編に一步も二歩も踏み込む方針を提案してきたからだ。

過去の大会でも、毎年共産党系から「政党支持自由」論に立った修正案が出されるが、今年共産党系からの二本の修正案（都教組・都職労）に加えて、社会党系の陣営からも、国労が補強案を、また、都職・東水労の代議員が修正案を提出し、緊張感の高まる大会となった。

三多摩の「労戦統一」方針・第一次案が出てきたのは九月初旬で、この案を目にした幹部・活動家の間でかなりの騒ぎになった。なぜなら、全民労協の「進路と役割」が評価され、総評の「五項目」はその中に取り入れられ、「三課題」も解決をみるに至った、としたうえで、三多摩が三多摩のローカルセンターの中核となるべく、同盟や中連との団体間協議を開始していく、というしろものだったからである。左派はもちろん、はじめに単産や地区労を担ってきた中間派もこれには反対した。この動きを察知した推進派は、当初一次案でゴリ押しする予定だった九月二八日の幹事会および大会に次ぐ決議機関である評議員会を、「定数に満たない」ことを理由に流してしまい、「労組連絡会」という名の密室ボス会議で一部を手直しし、第二次案としてまとめる作業をおこなった。第二次案は「進路と役割」への評価などを削ったが、「全的統一」にむけて「対策委員会」を設置するし、団体間協議をはじめっていくという内容は変わりが無い。この第二次案が一〇月八日の幹事会にかけられ、国労などが修正意見を主張したが、多数決で幹事会案となってしまった。

こうして大会を迎え、前記の修正案や補強案が出されるとともに、大会会場の表舞台ではもちろんのこと、単産党員協などで激論がかわされたのである。

### 主要な意見

〈都職・東水〉我々が提案している修正案は東京地評幹事会が一月二日に決定した内容だ。団体間協議をはじめっていくのではなく、まず加盟単産・地区労で来年までの下部討議をすべきだ。反合闘争、一人の首切りも許さぬ闘いを強め、三多摩・地区労を強化しよう。

〈国労〉三多摩加盟の全単産・地区労の意向をキチンと反映すべきだ。

〈都高教〉臨教審にも行革にも日の丸・君が代にも賛成している全民労協とは一緒にやれない。都職・東水の修正、国労の補強案を支持する。

〈自治労〉原案を基本的には支持するが、労戦統一方針はストンと胸に落ちない。この問題では評議員会も開かれていないし、十分な討議をすべきだ。「対策委」の構成は決して選別することなく、全単産・地区労の意向を反映させるとともに下部討議を保障すべきだ。民社・同盟は自治労攻撃の先頭に立っており、いきなり団体間協議というのは納得できない。

〈小金井地区労〉地区労は単組の集まりだから皆で納得すくで決めてきた。この案を強制

してもらっては困る。

〈都教組八王子〉統一労組懇は決して戦闘的でも左翼的でもなく反対だ。国労からの発言には感銘を受けた。三労は国労の決意表明を反映するべきだ。

もちろん共産党系からも原案反対が表明された。賛成発言をしたのは次の二単産である。〈私鉄西東京バス〉労戦統一は緊急課題であり、時代は確実に全的統一に向かっていて。暮しや平和の危機を招いている要因の一つは労働者の分裂状態にある。労組が社会的影響力を強め、政治改革をめざせ。

〈東京一般〉原案に賛成だ。全的統一の中に組織拡大の意識をもって、単産・地区労が一体となって組織拡大をすべきだ。

### 運動をおこす

こうした論戦の中で、事務局長（自治労出身）答弁は国労意見を受け入れることを表明、焦点は都職・東水の修正案の扱いに移った。提案者の都職代議員はあくまで採決を主張した。しかし、大会議長が「修正案とは実質的に東京地評案だ。地評大会はこれから開かれるのであり、その前に三労大会で採決するわけにいかない」とはかり、会場はもめたが、最終的には幹事会で検討の後、三労議長（全電通出身）の「特別発言」で修正案は取り下げられることとなった。「特別発言」の主旨は「三労は都職の意を汲んでいる。①議論の徹底につくす。②加盟単産・地区労の意見を反映することは三労の伝統であり約束する。③決してボス交などで団体間協議は先行しない」というものだ。

「労戦統一」の議論が下へ広がるほどに、同盟にすり寄った右翼再編への反対意見が強まらざるをえない。そしてまた、いよいよ全民労連が発足する中で、「連合」に反対する単産・地区労の結束を強めること、これまでの総評路線にもとづく具体的な運動をおこしていくことが大切になっている。

(K)

## ◇ 読者からのおたより ◇

不十分ですが送稿しました。今度の地区労大会で事務局次長の役を受けました。「地区労ニュース」等の発行を手がけてみたいと思っています。 (鹿児島・N)

何時も「社会通信」をたたかいの指針として読ませていただいています。最近の山口書記長の言動、スタンドプレーには目にあまるものがあります。私たちは党内のルールにもとづいて、下部から民主的討論のもとに、しかも明確な形で突き上げる必要があります。去る一月八日、社会党日野総支部大会が開催されました。そこで私たち日野市職支部からも意見書を提出しました。 (東京・K)

八七年一月号より送付してください。貴社の労働、政治情勢の適確な情報、勉強になります。 (千葉・H)

日夜の活動、ご苦労さまです。仲間が購読してくれることになりました。(愛知・T)  
十数年ぶりの単組役選で二名の同志を中執にだすことに成功し、一定の足がかりを得ました。来年は倍増をめざして準備します。地方行革攻撃の本格化、自治労の右傾化、右翼労戦へのナダレ込み等、困難な条件下ではありますが、それがわれわれのたたかう条件だと聞き直りはじめています。 (東京・M)

## 社会党を守るために

### 戦車が国道を走行

先日、自衛隊の戦車が道東を三十両、道北を五両国道を走行した。自衛隊が員民の前に出てきている。軍事優先に向けた危険な行為だと思ふ。こうした行為が当り前に操作されることにファシズムの芽を感じる。

その背景には、社会党が基本政策を変更を策し（自衛隊の認知、日米安保体制の承認、原発の推進、韓国の認知等）、野党再編（社公民統合）Ⅱ第二自民党化につき進んでいること、革新勢力が弱体していることが最大の原因だと思ふ。敵階級に労働者階級がなめられていることの表われだろう。

あらためて、社会党の正しい路線（非武装中立、科学的社会主義等）にしっかりと目を向けるべきだろう。なぜ、この間大衆に支持されてきたのか。今も、労働者、勤労大衆に支持されていることを知るべきだと思ふ。

今、もつとも求められていることは社会党の正しい路線に確信を持ち、基本政策の堅持に向けて最大限の努力をするべき時期だと思ふ。そのたたかひの一翼として、党建協の活動は時宜に適した運動であり、われわれは今、立ち上がるべきときだと思ふ。社会党解体阻止、総評解体阻止こそ、軍国主義化に対する防波堤であり、それに向けた具体的展望を持たなければならぬ。社会党、総評の発展的解消など言っているときではないだろう。幹部・活動家は真剣に職場・地域にしっかりと目を向けるべきだろう。（北海道・A）

### 全電通の社会党ジャックを許すな！

過日の党機関会議で、日教の右派党員は「自分が全民労連に期待するのは、社会党に政権を取ってもらいたいからだ」と発言し、そのため「契約党員を大量入党させよ」と執行部にせまっていました。「政権をとること」に異議をはさむきはありません。しかし、問題は政権の性格です。「百万党構想」の焼き直しの「根無し草契約党員」にそのような主体性は期待できそうもないからです。

千葉の教組では先般の参院選にさいし、約二百人が入党しました。しかし選挙が終わったらはいやくも一七〇人がやめています。まさか党中央もこんな党員を求めているわけではありません。しかし、これが実態です。

また全電通の党員は「もつと支持団体の組合をふやせ」と「党ジャック」を画策してきます。これにたいするたたかひを、今後もつと強める必要があります。われわれの質・量の強化を急ぎたいと思つていきます。（東京・M）

### 党建会ブロック連絡会を結成

先日、党建会ブロック連絡会を三支部（名寄、士別、音威子府）の党員有志が結集し、渋谷代表を招いて党建協の意義を確認し、展望を持つてきました。それを受けて、音威子府党建会を発足させ、党員有志が会員、ニュースの拡大に君けて、基本路線の堅持のために具体的に活動、研究していくことを確認しました。

党支部に全党員が結集し、社会党を守っていく決意をつくつていきたいと考えています。

（北海道・A）

◇全通の仲間の報告から◇

## 郵便営業時代を切る

デタラメがまかりとおる。今年四月から「トップセールス」をメインスローガンにすえた郵便営業方針も年度も半ば、各局では「局長さん」を先頭に日夜の営業活動を展開していることだろう。

しかし、最近の営業活動、まさに世の中を常識をはるかに超えて「カレー」を売ったり、「花」を売ったり、かと思えば、味覚の秋に入り、リングにブドーと日に日に施策が進められてる。本来郵便局という公企業の行なう営業なら、単に「営利」だけにとどまることなく、「郵便局」の名のもと信頼ある仕事をするのが大切と思うのだ。

しかし、「カレー」を買う人はとよく見ればこれまたいつもの「職員購売運動」。業務収入を増やすためなら規程、規則はなんのその。郵政局長さん、うちの局は何%成績をあげました、とばかりに顔は郵政局へむいていても、局での仕事はデタラメがまかりとおる。「局内世論づくり」に必死の現場管理者。昔なら料金の適正徴収があたり前と思っただら、今では普通料金を徴収して郵便物表面には「速達」表示があたり前とはこれいかに。自ら「民営化」に拍車をかけるようなやり方には反対。

**勤務時間はメチャクチャ** 最近の勤務時間管理は特にひどくなっている。支部の締結する時間外労働（九月期は一日最高二時間）協定をはるかに超え、勤務時間前から仕事に着手したり、正規の勤務時間が終えても「自主超勤」で三時間も四時間も仕事（残業）をしたり。

しかし、これも無理もない話である。職場には本来勤務時間を管理すべき管理者は不在なのだから。管理者はどこにいろかと思えば、トップセールス、営業成績点検ミーティング、〇〇会議等に走り回っているだけだから。

トップセールス結構、ミーティング結構。しかし、そこに働く人の労働条件はどうなっているのかさえ「気づばり」のできない人が本場に管理者として適任なのか疑問だ。

「営業時代」といっても、我々の働く時間は正規の「勤務時間」であり、その昔いった「契約なくして労働なし」の原則を思いおこしてみたい。

なにもしない春闘といわれた今年の春闘で、組合指示板にはってあった「定時出退庁」の文字にどの位勇気づけられたか。

**物はふえても翌配は？** 九月に入り収穫の秋。郵便局の増収対策には一番のシーズン到来。「トップセールス」を中心にして今日も明日も、利用者の拡大に全力投球の花ざかり。「民間宅配便に負けじ」と大口利用者を獲得し、集荷に参上。しかし、利用者の反応は「いまイチ」。なぜかと問えば「翌日配達」にならないとのこと。

よくよく考えてみればそれもあり前のこと。我が「三八地域」の拠点、〇〇輸送局と

の結束バランスがとれていないのだから。  
 結束表も見ず、ただひたすら郵政局に顔をむけての営業感覚だからこれもやむなしか？

配送計画はあとおい 七月の人事異動をうけ、現場管理者の対応も従来とかわった。「選抜試験をうけよ」「統計グラフを書け」「事業論文を書け」と朝から晩までそれこそ口うるさくついてまわるのだから。あげくのはてが日曜日返上の「統計グラフづくり」。

一方、郵便営業を見れば、あそここの店とも、そっちの人とも契約できたとこれまた自慢顔の「トップセールス」。しかし、物を集荷してきてみてあつとおどろくタメゴロー。○輸送局へ送るにも、のせる余裕なし現行運送便。

急拠、臨時便対策にあわてふためく。「今すぐ臨時便を」といつてもそこは人間のやること。ついていけませんよ。こんな無計画な施策には。

利用者の拡大と配送計画は一体のものなんて誰が考えてもあたり前のこと。そんなこともわからないのですか「トップ」のみなさん。仕事は段どり八分からですよ。

## ◇ 編集部だより ◇

▽全民労連が発足しました。その本質は「連合歌」のパロデーどおりです。職場・地域でひろめてください。学習に役立つこと請け合いです。

▽前号の巻頭言でも指摘しましたが、全民労連には五つの弱点があります。第一に資本とたたかわないこと、したがって労働組合とはいえないこと、第二に大企業エゴをみきだしにしていること、したがって中小零細労働者(全労働者の約七〇%)の犠牲の上になりたつていること、第三に企業利益追求の集団であること、したがって地域労働運動を組織しないこと、第四に軍拡・憲法改悪に真正面から反対しないこと、第五に政党支持問題で統一できないことです。この弱点に切り込むことが問われています。

▽全民労連に反対する運動で一番重要なことは佐世保の仲間も指摘しているように、「下から」運動をつくることです。今の総評・社会党ブロックにわれわれを励ます方針はありませんから。われわれが自分が考え、実行し、仲間を勇気づけ、「総評・社会党」ブロックの誤りを克服するしかりません。

▽しばらく途切れていました「資本論第一巻を読む」を再開します。執筆者も編集子も読者の声に励まされながら。

▽「社会通信」号外「労戦統一と全国地県評の方針」を発行しました。定価六百円(送料込み)です。部数に限りがあります。購読ご希望の方ははやくに社会通信社までお申し込みください。

## 連載 『資本論』第一巻を読む 第42回

## 価値の尺度(五)

## 第三章(第一三—第一四パラグラフ)

貨幣名は重量名から分離していった

〔13〕貨幣である金自身の価値変動についての考察はこれくらいにして、本来の価値表現の考察に戻り、今度は歴史的・社会的要因によるその変遷についてみていくことにしよう。

\*〔1〕内はパラグラフ番号。「13」は岩波文庫第一分冊一七七頁六行目から。

〔14〕すでに〔7〕でのべられたように、貨幣名は最初その金属としての重量名で表わされたが、歴史的にみるとその本来の重量からは分離していったのである。その主な理由をマルクスはここで三つあげている。

まず第一に、近世までの世界では一国ごとに独自の貨幣をつくったわけではなく、経済的發展が遅れていたたり、自国内で貨幣材料を産出しない民族は、他の民族の貨幣をそのまま使ったのだった。たとえば中世の日本でも、中国の宋銭や明銭がそのまま国内を流通し、使われていた。古代ローマのばあい、これを「発展の程度の低い」民族というのはちょっと奇妙に思われるが、もともと農業国であったローマは、あまり必要ではなかった金貨などを先進民族であったカルタゴやマケドニアとの戦争による賠償金によって調達したらしい。このようなばあい、当然その貨幣名は国内の重量名とは異なるものとなった。

第二には貨幣に用いられる金属の素材が変わることにより、貨幣名とその重量が合致しなくなっていた。たとえばイギリスのポンドのばあい銀の重量一ポンドの価値だったものが、金貨が使われるようになると、その何分の一かの重量でも銀一ポンドと同一の価値をもつ金貨が一ポンドといわれるようになった。つまり貨幣名と重量名の分離がおこったわけである。一般的にいつて、時代が下がるにつれてより大きな価値表現の必要が生じたので、銅貨から銀貨、そして金貨が使われるようになった。この順序はギリシア・ローマ時代の神話的時代区分である黄金時代から銀の時代、そして青銅時代(以下英雄時代、鉄の時代と続く)という順序とはちょうど逆になっているが、もちろんマルクスが註五六でいつているように、こうした時代区分が歴史的正しさをもっているわけではない。

なお歴史上もっとも古い金貨はペルシア王大ダリウス一世(紀元前五五八—四八六)のつくった「ダリックス」といわれるものだとされている。しかし古代の巨額取引には地金がそのまま使われるのがふつうだったので、こうした古代の金貨はあまり実用的なものではなかった。古代ローマでそれらが「外国商品として流通した」というのもそうした事情からであろう。マルクスがここでいつている銀貨、金貨の発展も、ヨーロッパ商業が進展する一三世紀以後のことをむしろ念頭においているかとも思われる。中世以後のヨーロッパで最初につくられた金貨は、イタリアのフィレンツェで一二五二年につくられたフロリーン金貨である。

そして第三に、貨幣を発行していた歴代の国王らが貨幣を悪鑄したためにおこった貨幣の価値減価がある。これも重量名と貨幣名のいつその分離をもたらしただけは、いうまでもない。

(神津 朝夫)



# 「連合」の歌パロディ

「連合」の歌が二曲披露された。「幸福さがし」と「連合歌」だ。全民労連で本当に働くものが幸せになるだろうか。本誌の読者がさっそく替え歌を届けてくださったので紹介する。  
(編集部)

## I 幸福(しあわせ)さがし

- 1、泣き虫、弱虫、あわてんぼう  
みんな気のいい奴ばかり  
働く仲間の希望はひとつ  
十人十色の幸福さがし
- 2、やさしさまごころ、思いやり  
冬のころも吹きちぎり  
働く仲間が孤蝶のように  
舞って四方に幸福さがし
- 3、雨の日、風の日、この坂は  
夢をはぐくむ大通り  
働く仲間が手を取りあって  
いつも陽気に幸福さがし
- 4、遠くの白百合ほしがって  
そばのタンポポ忘れてる  
働く仲間の幸福さがし  
あしたこそはが、ララ、合言葉

## II 連合歌

- 1、仲間の愛が輪になって  
燃える熱意と湧く勇氣  
未来の大地ふみしめて  
理想はるかに夢ひらく  
輝くいのちあらたなり  
連合、連合、自由が誇り  
働くつどい明日をみて  
あふれる血潮、ひかる汗  
飛躍をめざし、輪をひろげ  
信義ひとすじ窓ひらく  
ふれあう心ゆたかなり  
連合、連合、希望のあかり  
しあわせ求め、手をとって  
こぼれる笑顔、はずむ歌  
力のかぎり、輪のかぎり  
すすめばひらく道がある  
世界にかよう道がある  
連合、連合、平和のあかり

## 幸福(しあわせ)つぶし

- 1、ウソつき、ペテン師、仕掛け人  
みんな懐古の奴ばかり  
右翼再編、希望はひとつ  
十人一色、しあわせつぶし
- 2、差別、選別、国自連  
中小、未組織吹きちぎり  
資本と手をくみ、毒蛾のように  
舞って四方に幸福つぶし
- 3、雨の日、風の日、なれあって  
謀議をこらす赤坂路  
政財官労手を取りあって  
いつも陽気に幸福つぶし
- 4、遠くの白百合忘れはて  
そばのタンポポおしつけて  
働く仲間の幸福つぶし  
むかしの夢こそ、ララ、合言葉

- 1、御用幹部が輪になって  
燃える私欲と湧く癒着  
日本の未来ふみつぶし  
理想も夢もあるものか  
輝くいのち失なわせ  
連合、連合、反共が誇り  
働くつどい選別し  
あふれる差別、ひかるカネ(かね)  
再編めざし、輪をせばめ  
邪念ひとすじ、窓とぎす  
連合、連合、暗黒のやみ  
豎山、竹下手をとって  
笑顔にかくす軍歌の音(ね)  
ペテンのかぎり、ウソかぎり  
すすめばおちる道がある  
ファッショにかよう道がある  
連合、連合、反動のあかし

一九八七年二月二日 新幹線車中で編(変) 詩・千葉和意三郎

## 社会通信号外

## 労戦統一と全国地県評の方針

地域労働運動を守るために！

## 幹部・活動家必携の資料と解説

労戦統一の問題は、総評大会が七月、「一九九〇年解散」を決めたため、主要な舞台は地県評、地区労の地域段階へと移りました。総評大会後、七月末から始まった地県評大会は、総評中央方針をめぐり激しい論議が展開されました。一〇月二〇日から開かれた総評地域集会でも、総評中央方針に批判と危惧が続出しました。

地域労働運動は反戦平和、春闘、権利、反「合理化」という総評の歴史と伝統をにってきた部隊です。地域労働運動の火を消してはなりません。本資料集は、このために作ったものです。地域労働運動にたずさわる活動家、幹部役員のみなさんのご活用を願ってやみません。

なお内容は左記のとおりです。全国地県評の方針は大会がまだ開かれていない和歌山、京都の二府県を除き、全国四五都道府県を網羅しています。

## 内 容

- 一 全国地県評方針の傾向と大会の特徴
- 二 ナショナルセンターの地域運動方針
- 三 全国四五地県評方針の要約
- 四 全国四五地県評方針の一覧表
- 五 地県評大会での主要修正案等
- 六 総評労働運動の歴史と伝統を守るために
  - (1) 一〇・一一集会のよびかけ(全文)
  - (2) 一〇・一二集会でのアピール
  - (3) 一〇・一二集会でのまとめ(要約)

十一月三〇日発行！

定価六〇〇円

お申し込みは社会通信社へ！！